

日本船舶海洋工学会

P-23 東アジア物流ネットワーク研究委員会シンポジウム

“東アジア物流の明日を考える～低炭素化シームレス化を目指して” 開催報告

報告者：末岡英利

平成 23 年 7 月 8 日（金）東京大学本郷キャンパス山上会館にて開催。講演資料集配布。参加者は約 80 名で、参加者の内訳は産業界 30 名強／大学関係者約 20 名／研究機関（独法、財団等）約 20 名／行政関係者含めその他 10 名弱であった。

プログラムは、講演 3 件、P-23 研究委員による研究報告 2 件及び“東アジア物流 次世代海上輸送システムを考える”と題したパネルディスカッションで構成されている（ポスター参照）。基調講演（春成）は、現代を第 2 の大航海時代/アジアの時代と位置づけ、加速するアジアの時代に日本は対応できているか、日本海運の課題と役割は何かについて論じた。課題解決に向けアジア自由交通圏の構築を提唱している。

講演 1（石原）は、東アジアのコンテナ物流につき荷主を取り巻く環境の変化、物流コスト削減の現状について紹介し、日中韓のこれからの国際物流について考察した。Door to Door 輸送から SCM による Line to Line に物流領域が拡大することを示唆した。

講演 2（石井）は、RFID 技術をとりあげ ISO/TC104 における標準化の動向、経済産業省支援による RFID を用いた実証実験につき紹介し、今後、物流の可視化基盤構築が重要であると論じた。物流における情報イノベーションは世界制覇のキーとなると指摘している。

休憩を挟んで、研究報告 2 件の発表を行った。

研究報告 1（加納）は、域内近距離海上輸送（SSS: Short Sea Shipping）につき欧州とアジアの現状と取組みを比較検討しその特徴を紹介した。欧州は 1990 年代より SSS を運輸政策として掲げモーダルシフトの推進・物流効率化を図っているがアジアはこれからである。アジア域内の物流体系創造に向け、高効率で環境負荷の少ないアジア版 SSS（効率的物流ネットワークの構築と海陸一貫輸送システムの導入）の必要性を論じるとともに、日中韓物流大臣会合における政府レベルでの枠組みづくりを期待している。

研究報告 2（秋元）は、コンテナ輸送を離散化しコンテナ挙動をシミュレーション上で再現することにより最適な物流計画を選択する意思決定支援法につき報告した。シミュレーションによる事例研究として、

The poster contains the following information:

- 主催:** 日本船舶海洋工学会 東アジア物流ネットワーク研究委員会
- 後援:** 東京大学 大学院工学系研究科 海運造船新技術戦略寄付講座
- 【プログラム】**

13:30-13:35	開会挨拶	研究委員会代表 東京大学	末岡英利
13:35-14:05	基調講演 “東アジア物流の発展と日本の役割”	日本海事センター理事長	春成 誠
14:05-14:35	講演 “コンテナ物流の理論と実際 ～ 東アジアの現状と将来動向”	東京大学教授	石原伸志
14:35-15:05	講演 “物流サービスにおける情報イノベーション”	野村総合研究所上席コンサルタント	石井伸一
（各講演への質疑応答:10分程度予定）			
<休憩>			
15:30-16:00	研究報告 “東アジア域内の効率的物流ネットワークの創造”	海上技術安全研究所	加納敏幸
16:00-16:30	研究報告 “物流シミュレーション手法と物流計画支援”	東京大学	秋元博隆
16:30-17:30	パネル討論 “東アジア物流 次世代海上輸送システムを考える ～ 地勢的特徴を考慮したネットワーク、低炭素化のためのイノベーション、物流+人運:ROPAX Ferryの可能性、等”	パネリスト:講演者、合田浩之(日本郵船)、町田一兵(明治大学)	モデレータ:末岡英利
- 【申込要領】**
 - 申込先: 東京大学 海運造船新技術戦略寄付講座 末岡教授室(上坂綾子)宛
 - E-mail: kuzushikazu@kaiyodai.ac.jp
 - または 参加申込書 Fax にて、 TEL/FAX: 03-5841-6547
 - 申込期日: 平成 23 年 6 月 30 日(木)
 - 参加費: 無料
 - 定員: 100 名

シンポジウム開催案内のポスター

北米向け国内輸出港を集約した場合の荷主への経済的インパクト、グローバル製造業におけるコンテナ貨物流動の可視化による製品管理支援、の2例を紹介している。



講演の様子



会場からの質問風景

講演及び研究報告終了後、次世代海上輸送システムをテーマにパネルディスカッションが行われた。3つの論点、即ち、①地勢的特徴を考慮したネットワークの構築、②低炭素化のためのイノベーション、③物流+人流 Ropax Ferry の可能性 をとりあげ、まずパネリストより話題提供が行われた。①は日中韓シャトルに焦点を充て三国間シャーシ相互乗入れ等に関する問題提起(町田)、②は環境対応イノベーションを荷主は本当に求めているのかといった問いかけ(合田)、③は人流も視野に入れるべきといった問題提起と対応船舶としてのエコ型 Ropax Ferry 概念設計の紹介(末岡)である。

会場も交えて活発な議論が行われた。「低炭素化シームレス化というが市場はコスト最優先ではないか(低炭素化シームレス化に向けてのインセンティブの必要性)」、「荷主(大口 or 小口)・輸送品目(生産財 or 消費財)によってコスト・リードタイム・輸送品質・環境負荷に対する価値観が異なるのでないか(アプローチの方法は一律ではない)」、「それぞれの荷主の SCM は物流全体から見れば部分最適、全体最適化が必要ではないか(そのためには、物流情報の標準化・共有化、活用できるプラットフォームの構築が重要)」等、会場からも多くの意見が出された。最後にモデレータ(末岡)から、3つの提言 ～【1】制度変革、【2】システムイノベーション、【3】自由化・共有化～ が示され、パネルディスカッションを総括するとともに、本シンポジウムを閉会した。



パネルディスカッションの様子

記)

本シンポジウムは P-23 研究委員会の 2 年間に亘る活動報告も兼ねて開催しました。

P-23 研究委員会の研究報告書は下記 H P で閲覧できます。

・日本船舶海洋工学会 H P

http://www.jasnaoe.or.jp/research/p_committee_end.html

・海運造船新技術戦略寄付講座 H P

<http://www.sss.sys.t.u-tokyo.ac.jp/study/index.html>